

※時課の変更部分

【 第六時課 預言のトロパリ 第6調 】

誦経) ^{しゅさい} 主宰よ、^{われらなんぢ} 我等爾の ^{じゅうじか} 十字架に ^{ふくはい} 伏拜し、^{なんぢ} 爾の ^{せい} 聖なる ^{ふくかつ} 復活を ^{さんえい} 讚榮す。

【 提綱 第77聖詠 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて ^き 聴くべし。

誦経) ^{プロキメン} 提綱、^{だいろく} 第六の ^{しらべ} 調、^{じれん} 慈憐なる ^{かみ} 神は ^{われら} 我等の ^{つみ} 罪を ^{ゆる} 赦さん。



じれんなるかみはわれらのつみをゆるさん
慈憐神我等罪神赦

誦経) ^わ 我が ^{たみ} 民よ、^わ 我が ^{ほう} 法を ^き 聴け。



じれんなるかみはわれらのつみをゆるさん
慈憐神我等罪神赦

誦経) ^{じれん} 慈憐なる ^{かみ} 神は、



われらのつみをゆるさん。
我等罪神赦

【 イサイヤの預言書 29章13—23節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦経) イサイヤの ^{よげんしょ} 預言書の ^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて ^き 聴くべし。

誦経) ^{しゅか} 主是くの ^{ごと} 如く ^い 言う、^こ 斯の ^{たみ} 民は ^{くち} 口にて ^{われ} 我に ^{ちか} 近づき、^{くちびる} 唇にて ^{われ} 我を ^{うやま} 敬えども、^{その} 其 ^{こころ} 心

^{とお} は ^{われ} 遠く ^{はな} 我に ^{かれら} 離る、^{ひと} 彼等は ^{いましめ} 人の ^{おしえ} 誠を ^な 教と ^{おし} 爲して、^{いたづら} 教えて、^{われ} 徒に ^{とうと} 我を ^{ゆえ} 尊む。故

^み に ^{われ} 視よ、^{また} 我 ^{ひじょう} 復非常 ^{こと} の ^{もつ} 事を ^こ 以て ^{たみ} 斯の ^ま 民を ^{ひじょう} 待たん、^{きみょう} 非常にして ^{こと} 奇妙なる ^{その} 事なり、其

^ち 智者の ^ち 智は ^{ほろ} 亡び、^{その} 其 ^{ぼうりやく} 謀 ^{ぼうりやく} 者 ^う の ^{わざわい} 謀 ^{かなかれ} 畧 ^{ふか} 者の ^{ひそ} 謀 ^{ひそ} 畧 ^{ひそ} は ^{ひそ} 失せん。 ^禍 禍なる ^{かなかれ} 哉 ^{ふか} 彼の ^{ひそ} 深きに ^{ひそ} 潜みて、

そのさく しゅ かく ほつ そのわざ くらやみ おこな たれ われら み たれ われら
其策を主に隠さんと欲し、其事を幽暗に行いて、誰か我等を見ん、誰か我等を
し らん と 謂う 者。何ぞ無知なる。陶 人 を 視て、土塊の如く意うべけんや、造ら
れし物は己を造りし者を指して、彼我を造りしに非ずと云うを得んや、形づく
られたる器は己を形づくりし者を指して、彼知識なしと云うを得んや。尚頃く
して、リバンは變じて園と爲り、園は林の如く視らるる時來らざらんや。當日聾者
は書の言を聞き、盲者の目は瞑より暗より見るを得ん、苦しむ者は主の爲に益
よるこ 喜び、貧しき人はイスライリの聖者の爲に樂まん。蓋強暴者は絶え、侮慢者
は失せ、不義を逞しくして、言を以て人を苦し、門に在りて鞫を促す者に機檻
を設け、正しき人を退くる者は盡く滅びん。故にアヴラアムを贖いし主はイ
アコフの家の事に就きて是くの如く言う、其時イアコフは羞を啓かず、其面は色
を失わざらん。蓋彼は己の諸子、我が手の造工を己の中に見ん時、彼等は我
の名を聖とし、イアコフの聖なる者を聖とし、イスライリの神を畏れん。

※九時課の【 本日のコンダク 】「甘んじて十字架に擧げられし…」に代えて

【 十字架叩拜のコンダク 第7調 】

ほのおのつるぎはすでにエデムのもんをまもら
焰 剣 既 門 守
ず、けだしこれをしりぞくるしえいなるじゅ
蓋 之 卻 至 榮 十
うじかのきはいたれり、しのはりおよび
字 架 木 至 死 刺 及
ぢごくのかちはほろびたり、けだしな
地 獄 勝 亡 蓋 爾
ぢは、わがきゆうせいしゅよ、あらわれて
吾 救 世 主 現
ぢごくにあらものによべり、またらく
地 獄 在 者 呼 復 楽
えんにいれ。
園 入

※九時課の畢り（エフレム祝文の後）に十字架の伏拜

【 讃詞 第2調 】

しんじゃよ、きたりて、いのちをほどこすき木
信者 来 生命 施 木

にふくは いせ ん。むかしてきはいつらく
伏 拜 昔 敵 逸 樂

をえばにしてわれらよりふくをうばい、
餌 我 等 福 奪

われらをかみよりとおざけられしものとな爲
我 等 神 遠 者 爲

せり、いまハストこうえいのおうはあ
今 光 榮 王 甘

まんじてそのうえにてをのべて、われらを
其 上 手 舒 我 等

はじめのふくにあげたまえり。しんじゃよ、
初 福 舉 給 信者

きたりて、せいなるきにふくは い
来 聖 木 伏 拜

せん。われらは、これをもってみえざるて敵
我 等 此 以 見 敵

きのかしらをくだくにたうるものとな爲
首 堪 者 爲

り。しよぞくしよみんよ、きたりて、うた
諸 族 諸 民 来 歌

をもってしゆのじゆうじかを と うと ま ん。おち
 以 主 十 字 架 尊 うと ま ん。おち
 たる アダムのまったきすくいなるじゆうじかよ、
 全 救 十 字 架 よ、
 よろこ べ、けんせいなるしよおうはなんぢ
 慶 虔 誠 諸 王 爾
 をもってほこりとなす、なんぢのちからによ
 以 爲 爾 力 因
 りていみんをせいふくすればな り。わ
 異 民 制 服 我
 れらハスティアンはいまおそれをもつてなんぢにせつ
 等 今 畏 以 爾 接
 ぶんして、なんぢのうえにていせられしかみ
 吻 爾 上 釘 神
 をさんえいしてい う、そのうえにてい
 讚 榮 日 其 上 釘
 せられししゆよ、われらをあわれみたま
 主 我 等 憐 給
 え、なんぢはじんじにしてひとをあ
 爾 仁 慈 人 愛
 するしゆなればな り。
 主

【 讚詞 第8調 】

こんにちぞうぶつのしゅさい、こうえいのしゅはじゅ
 今日造物主宰、光榮主十

うじかにていせられ、わきをささ
 字架釘脇刺

る。きょうかいのかんみたるものはいとす
 教會甘味者はいとす

とをなむ、くもをもっててんをおおうも
 嘗雲以天覆者

のはいばらのかんむりをこおむらせら
 棘冠冠

あれ、はづかしめのころもをきせら
 侮辱衣衣

る。てをもってひとをつくりしものはく
 手以人造者朽

つべきてにてうたゐる、くもをもっててんに
 手批雲以天

きするものはほほをうたれ、つばき
 服者頬批唾

およびきず、はづかしめおよびむちうちを
 及傷辱及笞杖

うく。われのしょくざいしゅならびに
 受我贖罪主

かみは、じれんなるによりて、われ
 神慈憐因我

て い ざ い せ ら れ し も の の た め に い っ さ い を し
 定 罪 者 の た 爲 一 切 い を し 忍
 の ぶ 、 せ か い を ま よ い よ り す く わ ん
 世 界 迷 惑 救
 た め な り 。
 爲

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 と 聖 神 に 歸
 す 、

こ ん に ち せ い の さ わ ら れ ぬ も の は わ れ に さ わ
 今日 性 捫 者 我 捫
 ら る 、 わ れ を く な ん よ り と く も の は く な ん
 我 苦 難 解 者 苦 難
 を う く 。 め し い に ひ か り を た ま う も
 受 瞽 光 賜 者

の は ふ ほ う の く ち よ り つ ば き せ ら
 不 法 口 唾
 れ 、 と り こ に せ ら れ し も の の た め に そ の か
 虞 者 の た 爲 其 肩

た を む ち う ち に あ た う 。 し じ ょ う な る ど
 答 予 至 淨 童



うていぢよはははかれをじゅうじかにみ見
貞女母はは彼十字架見

て、いたくかなしみていえり、
痛哀 日

ああわがこよ、なんぞこれをなした
あ噫 吾子 何之 爲

る、しゅうじんよりうるわしきものはい
衆人 美者 氣

きなく、みばえなく、うるわ
き息 華榮 美

しきかたちなきものとあらわる。あ噫
容者 現 あ 噫

あわがひかりよ、われなんぢのいぬ
吾 光 我 爾 寝

るをみるにしのびず、こころはさか
見 忍 心 裂

れ、ときつるぎはわがたましいをつ
利 劍 我 靈 貫

らぬく。われなんぢのくるしみをとう
我 爾 苦 尊

とみうたい、なんぢのじれんにふくは
歌 爾 慈 憐 伏 拜

いす、ごうにんのしゅよ、こうえいはなんぢ
恒 忍 主 光 榮 爾 ち

に き す 。
 歸

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世

こんにちよげんしゃのこ と ば は かな え り 、 け 蓋
 今日 預 言 者 言 應

だ し み よ 、 わ れ ら は なん ぢ し ゅ の あ し の た 立
 視 我 等 爾 主 足

ち し と ころ に ふ く は い す 、 ひ と り ひ 人
 處 伏 拜

と を あ い す る し ゅ よ 、 わ れ ら は す く い の 救
 愛 主

き を う け て 、 ざ い あ く の く る し み 苦
 木 受 罪 惡

よ り と か れ た り 、 し ょ う し ん ぢ ゃ の き と 祈
 釋 生 神 女

う に よ り て な り 。
 因

※司祭が十字架を至聖所に戻し、王門前に戻ったら誦經「至聖なる三者、一性の權柄、、、」へ

【 第 1 4 0 聖 詠 第 7 調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給
まえ、しゅよわれにききたまえ、
主 我 聽 給
しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給
まえ、なんぢによぶときわがいのりのこ
爾 呼 時 我 禱 り の こ
えをいれたまえ、しゅよわれにききたまえ
納 給 主 我 聽 給
え、ねがわくはわがいのりはこうろ
願 我 禱 り は こう ろ
のかおりのごとく、なんぢがかんばせのまえ
香 如 爾 顔 前
にのぼり、わがてをあぐるはくれのまつ
登 我 手 舉 暮 祭
りのごとくいれられん。しゅよわれにききた
如 納 主 我 聽 給
まえ。

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば
主よ、我が口に 衛 を置き、我が 唇 の門を扞ぎ給え、我が 心 に 邪 なる 言

に 傾 きて、不 法 を 行 う 人 と 共 に、罪 の 推 諉 せ し む る 母 れ、願 わ く は 我 は 彼 等 の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い
甘 味 を 嘗 め ざ ら ん。義 人 は 我 を 罰 す べ し、是 れ 矜 恤 な り、我 を 譴 む べ し、是 れ 極 と

うるわ あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき
美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。

かれら しゅちょう いわお あいだ さん わ ことば にゅうわ き われら つち ごと き
彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り

くだ わ ほね ちごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ
砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾

たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも
を恃む、我が靈を退くる母れ。我が爲に設けられし罟、不法者の網より我を護

たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え
り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち
を其前に顯せり。我が靈の表に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ
る者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと
⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

なんぢ まえ つつし ため
の爾の前に敬まん爲なり。

われ わ たましい たつと しよく ふく かちく ごと め
ハリストスよ、我は吾が靈の尊きを諸愆に服せしめて、家畜の如くになれり。目

あ なんぢしじょうしゃ あお え しも ふ ぜいり ごと いの なんぢ よ かみ
を擧げて爾至上者を仰ぐを得ずして、下に俯し、税吏の如く祈りて爾に呼ぶ、神

われ きよ われ すく たま
よ、我を潔め我を救い給え。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

われ わ たましい たつと しよく ふく かちく ごと め
ハリストスよ、我は吾が靈の尊きを諸愆に服せしめて、家畜の如くになれり。目

あ なんぢしじょうしゃ あお え しも ふ ぜいり ごと いの なんぢ よ かみ
を擧げて爾至上者を仰ぐを得ずして、下に俯し、税吏の如く祈りて爾に呼ぶ、神

われ きよ われ すく たま
よ、我を潔め我を救い給え。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
④我が 靈 主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより 甚 し。

しゅうちめいしや かい くるしみ あと したが いさ おお こうろう あらわ
衆 致命者の會はハリストスの 苦 の蹤に 随い、勇ましく多くの功勞を 顯し

かれ ふけん くるしめびとおよ ふほう しょう まえ かみ つた おお くるしみ しの
て、彼を不虔なる苛虐者及び不法なる諸王の前に神として傳え、多くの 苦 を忍

てん そんえい え のぞ いまこれ え よろこ むけい ぐん しゅうひん とも
びて、天の尊榮を獲んことを望めり。今之を獲て 喜 びて、無形なる軍の衆 品と偕

しゅ まえ た たま
に主の前に立ち給う。

ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋 憐 は主にあり、大なる 贖 も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな
彼はイスライリを其 悉 くの不法より 贖 わん。

しゅ なんぢ ちめいしや なんぢ い なんぢ いましめ はな かれら きとう
主よ、爾の致命者は爾を諱まざりき、爾の 誠 より離れざりき。彼等の祈禱に

よ われら あわれ たま
因りて我等を 憐 み給え。

ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

しゅ なんぢ ちめいしや なんぢ い なんぢ いましめ はな かれら きとう
主よ、爾の致命者は爾を諱まざりき、爾の 誠 より離れざりき。彼等の祈禱に

よ われら あわれ たま
因りて我等を 憐 み給え。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そんな
①蓋 彼が我等に 施す 憐 は大なり、主の眞實は永く存す。

じゅなんしやちめいしや てん じゅうみん もの ちじょう くる おお ぐなん しの
受難者致命者、天の住 民たる者は地上に苦しみて、多くの苦難を忍びたり。

しゅ かれら きとうきがん よ われらしゅう まも たま
主よ、彼等の祈禱冀願に因りて我等衆 を護り給え。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖 神に歸す、

なんぢ ぞうせい めい わ ため はじめおよ あわせ な けだしなんぢ み み えざる せい
爾が造成の命は我が爲に初 始及び合成と爲れり、蓋 爾は見ゆると見えざる性よ

われい もの あわ ほつ われ からだ つち つく いのち ほどこ しんみょう なんぢ
り我生ける者を合せんと欲して、私の 體 を土より造り、生命を 施す神 妙なる 爾

いき われ たましい あた たま ゆえ きゅうせいしゅ なんぢ しょぼく い もの ち
の嘘にて我に 靈 を與え給えり。故に救 世主よ、爾の諸僕を生ける者の地に、

ぎじんら すまい やすん たま
義人等の住所に 安 ぜしめ給え。

【 生神女讚詞 第6調 】



いまもいつもよよに、アミン。
 今も何時世世に、アミン。
 しせいなるどうていぢよよ、だれかなんぢを
 至聖童貞女、誰爾
 さんびせざらん、だれかなんぢのいたりて
 讚美誰爾至
 きよきさんをうたわざらん。よのなきさき
 淨産歌世無先
 にちちよりひかるどくせいのこはなんぢき
 父光獨生の子は爾淨
 よきものよりいいがたくみをとりにてい
 者言難身取に出
 で、ほんせいのかみはわれらのためにほんせい
 本性神我等爲本性
 のひととなれり。そのくらいひとつに
 人爲其位一
 してあいわかれず、そのせいふたつにして
 相分其性二
 あいうしなわず。きよくしていたり
 相失ず。淨至
 てさいわいなるものよ、わがたましいの
 福いわいなるものよ、わが靈の

あわれみをことうむらんことをかれにいのりた給
 憐 蒙 彼 禱 給
 ま え 。

【 聖入 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
 聖 福 常 生 天 父
 せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
 聖 光 榮 穩 光
 ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく
 我 等 日 入 至 暮
 れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
 光 見 神 父 子 聖 神
 をうと う。いのちをたもうかみのこ
 歌 生 命 賜 神 子
 よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
 故 世 界 爾 を 崇
 ほむ。

【 第一の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、^{えいち} 睿智、^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし。

誦經) ^{だいし} プロキメン、^{しらべ} 第四の調、^{ぼくしゃ} イズライリの牧者よ、^{みみ} 耳 ^{かたぶ} を傾けよ。

イズライリの ^{ぼく} 牧 ^{しゃ} 者 よ、^{みみ} 耳 ^{かたぶ} を傾 ^け よ。

誦經) ^{ひつじ} イオシフを羊 ^{ごと} の如く ^{みちび} 導く者、^{もの} ヘルヴィムに坐する者よ、^ざ 己 ^{もの} を顯 ^{おのれ} せ。

イズライリの ^{ぼく} 牧 ^{しゃ} 者 よ、^{みみ} 耳 ^{かたぶ} を傾 ^け よ。

誦經) ^{ぼくしゃ} イズライリの牧者よ、

^{みみ} 耳 ^{かたぶ} を傾 ^け よ。

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{そうせい} 創世記の讀、^{よみ}

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

【 創世記 12章1~7節 】

誦經) ^{しゅ} 主はアヴラムに謂えり、^い 爾 ^{なんぢ} の地より、^ち 爾 ^{なんぢ} の親族より、^{しんぞく} 爾 ^{なんぢ} の父の家より出でて、

^わ 我 ^{なんぢ} が爾 ^{しめ} に示さんとする地 ^ち に往け、^ゆ 我 ^{われなんぢ} 爾 ^{おおい} より大なる民 ^{たみ} を出し、^{いだ} 爾 ^{なんぢ} を祝 ^{しゅく} し、^{なんぢ} 爾

^な の名 ^{おおい} を大 ^{なんぢ} にせん、^{しゅく} 爾 ^{しゅく} は祝 ^{もとい} 福 ^な の基 ^{われ} と爲らん、^{なんぢ} 我 ^{しゅく} は爾 ^{もの} を祝 ^{しゅく} する者 ^{なんぢ} を祝 ^{しゅく} し、^{なんぢ} 爾

のろ もの のろ なんぢ よ ち ばんぞく しゆくふく え しゅ かれ い
を 詛う 者 を 詛わん、爾 に 因りて 地 の 萬 族 は 祝 福 を 獲ん。アヴラム は 主 の 彼 に 言

ところ したが い かれ とも ゆ ち い
し 所 に 従 いて 出でたり、ロト も 彼 と 偕 に 行けり。アヴラム は ハルラン の 地 を 出でし

ときしちじゅうごさい そのつま そのあに こ およ そのあつ すべ
時 七 十 五 歳 なりき。アヴラム は 其 妻 サラ、其 兄 の 子 ロト、及 び 其 集めたる 總て

もちもの え ひとびと たづさ い ち ゆ
の 所 有 と、ハルラン にて 獲たる 人 衆 とを 攜 えて、出でて、カナアン の 地 に 往けり。

そのち たて へ ところ およ たか かし き いた そのとき
アヴラム は 其 地 を 縦 に 經て、シケム の 處 に 及 び、高き 椽 の 樹 に 至れり、其 時 カナ

ひとそのち す しゅ あらわ い われこ ち なんぢ すえ あた
アン の 人 其 地 に 住めり。主 は アヴラム に 現 れて 曰えり、我 斯 の 地 を 爾 の 裔 に 予え

かしこ おい かれ あらわ しゅ ため さいだん きづ
ん。アヴラム は 彼 處 に 於て、彼 に 現 れし 主 の 爲 に 祭 壇 を 築けり。

【 第二の提綱 】

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) プロキメン、第四の調、歡びて神、我等の防固に歌え。



よ ろ こ び て か み 、 わ れ ら の か た め に う
歡 神 我 等 防 固 歌
た え 。

誦經) 歌を執り、鼓と佳琴と瑟とを與えよ、



よ ろ こ び て か み 、 わ れ ら の か た め に う
歡 神 我 等 防 固 歌
た え 。

誦經) 歡びて神、



わ れ ら の か た め に う た え 。

【 祝福 】

司祭) 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) 箴言の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

【 箴言 14章15節～26節 】

誦經) 拙き者は凡の言を信じ、達き者は己の途を慎む。智者は懼れて惡を離

れ、愚者は己を恃みて不法者と交る。怒り易き者は愚なることを行うを得、

惟謀りて惡を行ふ人は惡まる。拙き者は無知を嗣業と爲し、達き者は知識を

冕と爲す。惡者は善人の前に俯伏し、罪者は義人の門に俯伏せん。貧しき者

は其隣にも惡まる、富める者には親友多し。其隣を藐る者は罪あり、貧し

き者を憐む人は福なり。惡を謀る者は迷えるに非ずや、惡を行ふ者は慈憐

と眞實とを知らず、唯善を謀る者には慈憐と眞實あり。凡の勞には益あり、唯

多言には損あるのみ。智者の富は其冕なり、愚者の度生は禍なり。正しき證

者は人の生命を救い、正しからざる者は謊を吐く。主を畏るる寅畏には堅き依頼

あり、彼は其諸子の爲に避所なり。

※ 願わくは我が禱は、、、へ